

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2672900293		
法人名	社会福祉法人 秀孝会		
事業所名	グループホーム京都ひまわり園 2階 ひまわり		
所在地	京都府八幡市八幡清水井20番地		
自己評価作成日	令和4年1月10日	評価結果市町村受理日	令和4年3月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2672900293-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1 「ひと・まち交流館」1階
訪問調査日	令和4年2月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所目標である「第二の我が家、第二の家族」を目指し、入居者一人ひとりが楽しいと思える事や役割を持ち、その人らしく生活することが出来る様に努めています。今年度もコロナウイルス感染拡大防止の為、面会・外出・外泊制限や家族、近隣との関わり方など生活全般において制約のある中で、日々の生活をより充実する事の出来る様に、ご本人を中心にご家族や介護・医療職が連携を図り支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

八幡市の石清水八幡宮の南方に社会福祉法人秀孝会の特別養護老人ホームやケアハウスなど、一群の総合福祉施設があります。その一角にある当事業所は設立から17年余りを経て平均介護度3.5という入居者の重度化にコロナ禍が加わり以前ほど活発な活動は出来ませんが、広い敷地を利用して外気浴や洗濯物干しなど入居者の思いや持てる力を尊重し何気ない日常での充足感を大切にされています。入浴はいつでも入れるようにお湯を張り、面会も府内の新型コロナ感染状況に配慮しつつ居室での15分面会の場を設けるなど入居者やご家族の思いに沿った温かい支援をされています。更に必要な時にすぐ往診して下さる主治医や訪問看護師の協力、隣接の特別養護老人ホームの理学療法士による運動面や適切な体位の来所指導、言語聴覚士による咀嚼や食物の呑込みの助言など、地域との医療連携や総合福祉施設の利点をフルに活かした手厚いサポート体制があります。ご家族の意向を汲み取りも可能で、設立当初の初心を忘れず最期まで優しい支援の手で包んでくれる事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念の「照千一隅」と事業所目標「第二の我が家・第二の家族」を職員間で共有している。理念と事業所目標は事務所、玄関に掲示し周知に努めている。	事業所目標は昨年職員全員で見直したが、同じ文言で良いという事で、継続を決めている。職員は法人理念や事業所目標を念頭に介護計画を立て日々の支援の中で実践を心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度も地域行事については全て中止となっていること、コロナウィルス感染拡大防止の観点からも地域との日常的な交流を図ることが難しい状況にある。	コロナ禍の現在は近隣との付き合いもほとんどなく、以前は地域の方を招いておこなっていた行事も事業所内で完結する形になり、地域との交流は滞っている。閲覧板は回さず町内の方がチラシとしてポストに入れてくれている。	コロナ禍にあっても、手作り品の寄贈などアイデアを募り、何らかの形で地域や保育所、小学校等とグループホームとの繋がりを絶やさぬ工夫をされるよう期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年間を通して認知症相談窓口を設置している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	八幡市役所高齢介護課、地域包括職員、利用者家族の構成員で2ヶ月に1度開催としている。今年度はコロナ禍の為、構成員が集まる会議開催ではなく、レジメを配布し意見を聴取する会議形態で開催している。会議録は高齢介護課、地域包括には配布、家族には来園時に閲覧してもらえるよう玄関にファイルを置いている。	コロナ禍により市の助言も得て書面会議とし、その中で八幡市や地域包括支援センター職員、入居者家族などに事前照会をしているが、意見は殆ど出ていない。また、コロナ禍で面会者数も減っている中、どれ位のご家族が玄関の運営推進会議議事録に目を通しておられるかの確認はできていない。	書面開催の場合は情報が取りにくく、議事録も簡素になりがちですが、新型コロナウイルス感染症への詳細な取り組み(消毒・手洗い・検温の実施頻度や発熱時の対応やパーテーション設置状況等)や一般報告事項として事故・ヒヤリハットの概略、入居者の年齢や男女比、平均介護度等の統計的な事項も議事録に加え、コロナ禍の今だからこそ一層透明性を高める工夫が望まれます。また、複数の方が手にする玄関前の議事録の閲覧方法の是非についてもご一考を願います。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の際に事業所の状況報告を行っている。今年度も集団指導は書面での開催となっており、質問票を送信している。必要時には適宜連絡や訪問を行い相談、助言を頂くようにしている。	事故報告書の提出などに関してメールや電話で市町村とのやり取りがある。また、法人本部と市の間で様々な連絡や相談があり、本部の担当者がグループホームも含めて市との連携を図っている。運営推進会議対面開催の際は市や地域包括支援センター職員の出席が、防火防災訓練には消防署からの来所指導がある。	

京都府 グループホーム京都ひまわり園 2階 ひまわり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を3か月毎に開催、法人全体で身体拘束について正しく考える機会を持ち、事業所内では日々のケアを振り返り身体拘束について学び、話し合う機会を持っている。	法人本部の身体拘束委員会に参加した職員が事業所スタッフ会議で伝達研修をしている。身体拘束チェック表に全職員がチェックをして会議で気づきを話し合っている。また、センサーマットや鈴等を一概に不適切と判断するのではなく、その活用方法により意味合いが変わることに気付けるように指導している。消毒や検温の必要性もあり玄関の内側扉は施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止委員会と並行して事業所勉強会を開催しケアの振り返りや学びの場を持っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会で学ぶ機会を持っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約、改定時には書面にて説明を行い同意・署名・押印を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や日常での電話、面会時等に意見を出して頂く機会を設けている。	本人・家族の要望を受け、コロナ関連の動向に注意しながらできる時は本人の居室で15分位の面会を可能としている。入居者からおやつ購入の希望があれば職員が買ってきたり、「本人はスカートが好きなのでスカートをかかせてほしい」などの家族からの要望を容れ本人に好きなスカートを選んでもらう等している。また、歌の好きな方が多く音楽の配信機器を購入して希望する歌を流している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月開催する職員会議で単年度事業計画の進捗把握を行い、適切な事業運営に努めている。	会議等では時間的制約がありなかなか職員意見は聞けていないが、口頭で日々聞き取り、内容を集約して毎月のスタッフ会議で話し合っている。簡単便利な音楽再生機能のあるIoT機器購入の提案や来客のチャイムが聞こえにくい事への対応策などを検討し解決した。人手不足への懸念の声もあり、法人として対処しているが、なかなか実を結んでいないのが実情と聞く。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的開催している安全衛生委員会で確認に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各研修への参加を積極的に行い、日々のケアに活かせるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症介護実践者研修やリーダー研修、その他、地域研修への参加を行い講師や他事業所の方から学んだことを自施設へ持ち帰り、日々の実践に活かせるように努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期段階では家族やそれまでに関わりのある事業所からも十分に情報収集し、本人との関わりを多く持ち、安心できる関係性を作る事に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の不安や要望等を発信してもらえるように初回1度だけでなく、こまめに聞く機会を持っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時には短期間でのケアプラン作成を行い、入所後の生活を通して修正していけるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の利用者がその日やその時にできる事を考えて必要部分の支援を行っている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	電話や面会時に生活状況を共有して頂けるよう報告に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	LINE電話面会や予約制の面会を行っている。施設から出かけての関係継続支援は難しい状況である。	事業所の庭でのティータイム、歌の好きな方の歌の時間、誕生日に本人の茶道具を使ってお茶会をするなど趣味を生かした取り組みをし、手紙や年賀状の代読や投函の支援などもしている。コロナ禍でも府内の感染者の動向を見ながら、家族や友人の面会やオンライン面会の支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の利用者の体調や気分配慮し、利用者同士が主体的に関わりあえる時には職員はそれを支える支援を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	コロナ禍が落ち着けばホームでの活動に協力したいとの声を契約終了した家族から頂いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントシートの活用や職員会議での個別ケアカンファレンスを通して各職員が得た様々な情報を職員間で共有、分析しケアに返す事ができるようにしている。	入所時に1度、更にその後の追加情報を加えてアセスメント表を作成し、6か月ごとに更新している。アセスメントには日頃聞き取った本人や家族の意向、業務日誌からの抜粋や日々の介護記録や職員の気づき、医師や法人理学療法士などの意見、毎月のケアカンファレンス等を反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初期段階以外にも日常生活の中で入居者や家族から新たに情報を得たことを追加情報として把握できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の細かい情報についてはケース記録に記入し、特記事項は情報把握がしやすい様、日誌に記載している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人やご家族、主治医からの意見を聴取し、スタッフの意見も反映し計画原案作成に努めている。	アセスメント表から必要な支援を抽出し介護計画を作成している。計画には介護以外に医療的支援等も盛り込み、サービス担当者会議で関係者間の合意形成を図っている。個々の介護記録用紙の上部に介護計画が印字され、職員はそれに基づいて支援をし、自らの実践を日々記録・評価している。通常は6ヶ月に1度モニタリングと介護計画を更新するが著しい変化があれば随時更新する。	

京都府 グループホーム京都ひまわり園 2階 ひまわり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々支援状況を記録し、毎月モニタリングを行い必要に応じた計画作成や見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問看護、訪問マッサージや訪問歯科診療の受け入れを行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で外出制限もあり、これまで同様の地域資源活用は行っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人やご家族が希望する医療を受けることが出来るように、その意向に合わせてご本人・ご家族と医療機関を繋げる支援を行っている。	従来の主治医にかかっておられる方が2名あり、そのうち1名は訪問診療を受け、他の1名は家族と通院されている。7名の方は事業所の提携医による訪問診療と訪問看護を定期的に受け、24時間のサポート体制がある。マッサージ師の訪問や、歯科医の定期訪問や往診、歯科衛生士の口腔衛生指導、法人の理学療法士や言語聴覚士の来所指導もあり多彩な支援体制で臨んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携をしている訪問看護ステーションから週2回訪問看護師が来園した時、または必要に合わせて24時間オンコール体制で看護師への相談や報告を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には施設から情報提供を行い、退院時には退院前カンファレンスや看護サマリー等で情報収集しスムーズな退院に繋げている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に看取りケアについての説明や意向の確認を行っている。定期カンファレンスの際には終末期の意向について変化がないか確認を行っている。	「看取り介護の指針」を定め、家族や医療・介護スタッフ連携のもとで看取りがおこなわれている。終末期の入居者のご家族には新型コロナウイルス感染症に注意しながら居室で一緒に過ごし、十分に本人との別れが出来るよう配慮をしている。この1年で3名看取り、経験のない職員には貴重な体験となった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急、事故発生時のマニュアルを整備している。救急搬送希望の有無を明確にすることで、ご家族や速やかな報告と管理者への報告、対応の指示を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災の避難訓練を隣接する法人施設と協力体制、警備会社との連携体制を図りながら年に2回行っている。そのうちの1回は消防署立ち合いのもと訓練を行っている。	災害訓練は法人全体でおこない、グループホームは時間をずらして実施している。年2回のうち1回は夜間想定とし車椅子の入居者も一緒に2階からの避難訓練をおこない、地震対策は机上訓練で実施した。備蓄はサバイバルフードや水、リネン類など3～4日分位が福祉避難所の法人本部にある。事業継続計画(BCP)は災害の方は完成し、感染症は作成途中であるが完成後も適宜手直しをする予定である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月の職員会議の中で個々への対応について職員間で検討、共有している。	「利用者の人格を尊重し、…中略…適切な処遇について不断の努力をする」事を運営規定に掲げ接遇の研修などで入居者対応を振り返っている。名字に「さん」付けで呼ぶことや声のトーンに注意し、服装も職員と部屋で一緒に選ぶようにし、食事エプロンは着用せず汚れたら着替えるようにしている。可能な場合は入浴時の同性介助を心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	重度化が進み、思いや希望の表出や自己決定が難しくなっていく中で、ご本人が負担とならない範囲で気持ちを伝えたり自己決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別ケアや個人の生活リズムへの配慮を行う意識を持ち出来る限り希望に添える様に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの衣類を着る、今日は帽子をかぶりたい、化粧水をつける等、個々の好みに合わせて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	業者に委託した調理済みの食事をとっている。盛り付けや配膳等、個々の出来る事を行ってもらい役割を持ちながら食べる楽しみが充実できるように支援している。	ご飯はユニットで炊き、副食類は調理済みのものを温めて使用している。委託業者もいろいろ工夫をしてもち麩の雑煮、摘み草粥、郷土料理等季節感のある献立となっている。1月1日にはお赤飯とおせち料理で祝っている。朝は週に3度パン食とし、おやつに果物や白玉ぜんざいを作り楽しんでいる。週1度事業所で手作りカレーを作る案が出ている。刻み食やミキサー粥などで重度の方にも対応している。飲み物は市販のものに加え、たまにドリップコーヒーを楽しんだりしている。盛り付けや、テーブル拭き等入居者の出来ることをしてもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分量などを記録し、介護職員や医療職で共有することにより補食対応など状況に応じて速やかに対応することが出来ている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声かけや介助にて各居室の洗面所で口腔ケアを行っている。定期的に歯科衛生士からの口腔ケアを受けている方もいる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄について時系列で記録し、適切な援助が出来るようにしている。時間帯によって布パンツにしたり、オムツやパットの種類を使い分け、ご本人の負担とならない範囲でトイレでの排泄を目指し支援している。	重度化により自立の方はおられず、何等かの介助を要するが、なるべく快い状態を保つための支援を心掛けている。自宅では紙パンツであったが昼は布パンツやパットを使用するだけで過ごせるようになった方や他施設ではオムツ内排泄のみだった方がトイレ誘導でトイレで排泄できるようになった例がある。二人介助の方もおられる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	好みの飲み物を提供したり、白米にオートミールを入れて炊き込み、食物繊維の摂取が出来るようにしている。		

京都府 グループホーム京都ひまわり園 2階 ひまわり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個々の気分やタイミングで心地よく入ってもらえる様に朝から夕方まで入浴提供の時間を確保している。季節湯のゆず湯や入浴剤を使用したり、歌を楽しみながら湯に浸かったり心地よい入浴時間となる様努めている。	一緒に着替えを選ぶことから関わり、浴室では本人と話をしたり歌を歌ったりしてコミュニケーションを取っている。好みのシャンプーや入浴剤を用いたり、季節湯を楽しむこともある。毎回湯は入れ替え、なるべく本人の入りたいたい時に入れるように準備している。拒否の方には「足をきれいにしよう」などと声掛けを工夫して誘う。入った後は非常に満足されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室内温度調整や不安などへの心理面への支援を行い、安眠に繋がるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の増減薬があった時には職員への周知と、薬変更後の変化について医療職への報告を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	主に家事関連活動に重点を置き、個々がこれまでにしてきたことや今できる事で役割を持ち生活できるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年度も地域行事については全て中止となっていること、コロナウイルス感染拡大防止の観点からも地域との日常的な交流を図ることが難しい状況にある。	コロナ禍以降、殆どグループホームの外周くらいにしか出かけていない。これといった活動ができない中、庭にテーブルを広げておやつを食べたり、ミカンの木を植えたり、庭の草引きをしたり、洗濯物を干して取り込んだりの日常生活をゆったり温かなものにする様な雰囲気づくりに気を配っている。	例えば大型テレビに桜や紅葉の名所のビデオを流し花見や紅葉狩りの気分を味わう、車中ドライブで車窓からいつもと違った自然を感じる、昔住んでいた入居者の自宅近くを車で通るなどして、外出や非日常を感じる機会を作り、ちょっとした気分転換をさせては如何でしょうか。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、お金を所持している入居者はいない。日常的に買い物へも行けないため、支払い等の支援も行えていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望がある時には個々の希望に合わせて対応している。また、職員が間に入り電話でのやり取りができるようにしたり、手紙や年賀状を家族に送る支援をしている。		

京都府 グループホーム京都ひまわり園 2階 ひまわり

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日中は常時窓を開けて換気し夜間は換気扇を回している。共用の空間は毎日入居者と職員で掃除している。館内は入居者と一緒に作った装飾を飾ったり、スマートスピーカーを利用して好みの音楽をかけたりしている。	南向きの大きな窓のあるリビングには殺菌・脱臭機能付きのオゾン発生器を備え、ソファや大小のテーブルを置き、入居者の好みや状態に合わせて居場所を選べるようにしている。食堂のカウンターテーブルが高く、入居者はリビングのテーブルで食事の盛り付けなどを手伝っている。車椅子の方もテーブル拭きや紙モップの掃除等できることをしている。洗濯物畳みをする方もあり、ソファで昼寝をされている方もある。日中ほとんどの方が陽当たりの良いリビングに出て好きな場所で好きなことをして穏やかに過ごされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	他の方と過ごす事がしんどい時には一人で落ち着けるように個々の居室で過ごせる環境を整えたり、みんなとワイワイ過ごしたい時には職員が間に入り楽しく過ごせる環境を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前までに使用していた使い慣れたものを引き続き使用してもらえる様に入所時の準備を行ってもらっている。	室内は比較的広く、カーテンや、クローゼット、洗面台、エアコンなどが備えられている。自宅からタンスやテーブル、椅子、仏壇、飾り物などを持参し、家族と相談の上本人が落ち着ける配置にしている。入口に暖簾をかけている方や床に転倒時の衝撃を緩和するクッションを敷いておられる方もある。室内の掃除は職員とともに1日置きにしている。ドアやドアノブは職員が日に2回消毒をしている。隣家とは距離があり、南面は公道となっており、採光も景観もよい。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	エレベーターは本人の能力に応じて使用している。トイレ案内表や表札を設置し分かりやすい環境作りに努めている。		